

# ボクの最期



mikatuki98

ボクの名前はゴキ。日本ではゴキブリと呼ばれている昆虫さ。エッ？ 昆虫じゃないだろうって？ そうなんだ。何でか知らないけど、ボクたちをみんな害虫扱いするんだ。ちゃんと6本足の昆虫なのにさ。ボクは悲しいよ。一体ボクがどんな悪いことをしたって言うのさ。

だけどボクのオヒメサマは違う。だってボクのことを一度も邪険にしたことなんてないんだ。それどころか、ずっとボクたち家族を見守ってくれているステキなオヒメサマさ。

そんなオヒメサマの部屋に、ボクのひーひーおじいちゃんが棲みついたのは、今から5年前のことなんだって。おとうさんの話によると、ひーひーおじいちゃんがオヒメサマの前に姿を見せたとき、オヒメサマはとっても驚いたんだ。だけどオヒメサマはひーひーおじいちゃんを殺そうとはしなかった。オヒメサマ以外のニンゲンには、何度も殺されそうになったけど、オヒメサマだけは逃がしてくれた。そして優しい声でこう言ったんだ。

「まあ～ ゴキちゃん！ ビックリするから急に出て来ないでね」

ひーひーおじいちゃんはもう大感激で、よし！ ココでずっと暮らそう、と思ったんだって。ボクがひーひーおじいちゃんでも同じことを思ったと思うよ。でも、ひーひーおじいちゃんは、心優しいオヒメサマをもう驚かせちゃいけないって思って、それきりオヒメサマの前には姿を見せなかったんだってさ。ひーひーおじいちゃんて律儀なんだなあ～って、ボクは思ったよ。うん。何だかひーひーおじいちゃんカッコイイや。

それ以来、ボクたち家族はみんなひーひーおじいちゃんの言いつけを守って、ずっとオヒメサマの前に姿を見せないように気をつけて来たのさ。

ところがある晩。オヒメサマの部屋のダンスの後に居たボクの耳に、何だか心地いい響きが聞こえて来た。ボクは何だろう、と思ってジッと耳を傾けてみたけど、ハッキリ聞こえないから少しだけ、と思ってダンスの後から響いてる方向へ移動してみたら、その響きは音楽に合わせて歌ってるオヒメサマの声だったんだ。

「ああ～ オヒメサマ楽しそうだなあ～ ボクも一緒に歌いたいなあ～」

ボクはしばらく、オヒメサマの歌声に合わせて自慢の触覚を揺らしてたんだ。でも段々ボクは、歌ってる声だけじゃなくて、オヒメサマの歌っている姿が見たくなって来てしまった。

「一目だけって、ダメだよな？ ああ、どうしよう。すごく見たいよ。でも、ダメだよな？ う～ん、でも、チョットだけなら、いいよね？」

結局ボクは心を決めると大きく息を吸い込み、ドキドキし始めた心臓を一度落ち着かせると、ダンスの後から出て来て、ゆっくりゆっくりと壁に沿って歩き出してしまった。

「……オ・ヒ・メ・サ・マ…… ハッ！ 居たっ！」

と次の瞬間、ボクの触覚は硬直してピンと立ったまま心臓だけが物凄いスピードで動き出し、鼓動が一瞬、オヒメサマの歌声をボクの耳から遮断してしまった。

「あ・あ・あ ……」

とその時、ボクの気配を感じたオヒメサマが、座っていた椅子ごとクルッと回り振り向くと、遂にボクを発見した！

「わあ！ カミサマ！」

オヒメサマに姿を見られてしまったボクはもう、身体が自分のものじゃないみたいに動かなくなってしまうと、頭の中はもう完全にパニック状態だった。

「どうしよう どうしよう ひーひーおじいちゃん、ゴメン！ ボク、オヒメサマに姿を見られちゃったよ。か・か・か・かくれなきゃ…… で・で・でも身体が……」

だけどボクは、パニック状態に陥りながらも思った。

「ボクがひーひーおじいちゃんの言いつけを破って、オヒメサマの姿をチョットでも見たいという欲望を抱いたから、だからこんなことになってしまったんだ。きっと天国に行ったら、一番にひーひーおじいちゃんに怒られる。ああ、ひーひーおじいちゃん、ゴメンナサイ」

するとボクの心の声を聞いてたかのようなタイミングで、オヒメサマがボクに、このボクに！声を掛けたんだ。

「あら、ゴキちゃん！ 居たのね？ こんばんは^^」

嗚呼！もうボクは天にも昇る心地だよ。だって、だって、オヒメサマがボクのことをゴキちゃんと呼んでくれたんだよ。ゴキちゃんだよ！ みんな、みんな、ボクの姿を見かける度に<ギャー>って叫んで、ボクの名前は<ギャー>じゃないのに、ボクをただ殺そうとするだけなのに。それに比べて、オヒメサマって何て優しいんだろう。ゴキちゃんて…… はあ～ 思い出だけでも赤面しちゃうよ。しかもこんばんは^^ だよ！ ニンゲンに挨拶されたのなんて、生まれて初めてなんだから。

だけど、喜びに浸ってる暇なんてなかった。だって気がつくと、オヒメサマはボクのすぐ側まで来てて……

「わあ！ オヒメサマ！！！」

アッ！ と驚いてオヒメサマを見上げたけど、ボクはもう恥ずかしくて恥ずかしくて、硬直していた身体が何かに弾き飛ばされたみたいに、元居たタンスの後ろに逃げちゃった。

「あ～あ、情け無いなあ～ ボク。せっかくオヒメサマがこんばんは^^って言ってくれたのに…… コンバンハ^^ オヒメサマ♪ な～んてさ。言いたかったな。チェッ！ でも、オヒメサマってホントにステキだったなあ～ ひーひーおじいちゃんの言った通りだったよ。うん^^」

それからとも言うもの、ボクはオヒメサマが部屋にやって来る時間が楽しみになった。今までは気づかなかったけど、オヒメサマはいつも決まった時間に部屋にやって来ると、先ずストーブの火を点けてくれる。どうりでこの部屋が一番居心地が良いと思ってた。なんたってボクは冬の寒さが一番苦手だから、暖かくしてくれるのが何よりも嬉しい。

それからオヒメサマは音楽を流すんだ。ラジオからだったりCDからだったり、たまにテレビで音楽番組を観ていることもある。だからボクもオヒメサマと一緒に音楽に耳を傾けるのさ。そして初めて出逢った晩のようにオヒメサマが歌を歌う時は、ボクも歌声に合わせて自慢の長い触覚を揺らす。とっても楽しいよ。

ところで音楽を聴きながらオヒメサマは何をしてるのかって言うと、ボクが偵察したところによると、この前は絵を描いていたよ。

「へえ～結構カラフルな絵を描くんだなあ～ 綺麗だなあ～」

身体が真っ黒なボクは、絵の色彩で目がキラキラしっちゃった。ボクも七色になってみたいな。な～んてね。あとパソコンの前にずーっと座ってカチャカチャ音を立ててるから、何してるのかなあ～って壁に登ってそーっと覗いてみたら、沢山文字が並んでビックリしたよ。でも、もっとビックリしたのは、壁に止まっているボクにはてっきり気付いてないと思ってオヒメサマが、急に話し掛けて来たこと。

「ねえねえ、ゴキちゃん。このお話の主人公の名前、ゴンタにするかゴンスケにするか迷ってるんだけど、どっちが良いと思う？」

「ええー ボ・ボク…… う～んと」

オヒメサマのイキナリの質問に、ボクは答えに困ってずーっとモジモジしてしまって、またまた情けなかったな。でもボクに訊いてくれたことがとても嬉しかったよ。デヘヘ。それにゴンタとゴンスケもゴキのゴで始める名前だったから、どっちもイイカンジだなんて思ってたんだ。

そんな訳で、ボクはとにかくオヒメサマと一緒に過ごす夜が大好きだったんだ。

そんなある日、夜が来てボクはいつものようにオヒメサマが部屋にやって来るのをワクワクしながら待っていた。なのに、お決まりの時間になってもオヒメサマは部屋に現われない。

「あれ？ オヒメサマ…… 今日はどうしたんだろ？」

少し遅れるのかな、と思ったボクは少しだけ待ってみることにした。でも、やっぱりオヒメサマはやって来ない。

「……ホントにどうしちゃったんだろ？ 何かあったのかなあ～」

ボクはスゴク心配になって来て思わず部屋を出て行くと、階段の一番上の端っこでオヒメサマを出迎えることにしたんだ。

「まだかなあ～ まだかなあ～」

それから10分間くらい経ったのかなあ？ ボクは階段の下の方をジッと見つめながら自慢の触覚を左右に振り、今か今かとオヒメサマを待っていた。と、遂にオヒメサマが階段の下に姿を見せた。

「あっ！ オヒメサマ来た！」

ボクはいつもよりドキドキしながら、オヒメサマが階段を一段二段と上がって来るのを見守っていた。

「ボ・ボクに気付いてくれるかなあ……」

三段四段五段とオヒメサマが階段を上がる。徐々にオヒメサマがボクに近付いて来る。そして十四段ある階段のうち十段目になった時、不意にオヒメサマが立ち止まった。と思ったらボクを発見！

「あっ！ ゴキちゃん。わたしを待っててくれたの？」

ボクはもう嬉しくって嬉しくって、うん！と大きく頷くと自慢の触覚を大きく左右に何度も振って見せたよ。するとサスガ！ ボクのオヒメサマだ。ボクの触覚サインを直ぐに分かってくれて言うんだもん。

「そう！ それはありがとう。嬉しいわ」

あーもう、ボクはめちゃうちゃ嬉しいのと、めちゃうちゃ恥ずかしいのとで、思わず踊り場をグルグル回って頭の中がグチャグチャになるくらい興奮しちゃったてた。だからオヒメサマが最後の十四段に到着するや否や、慌てて部屋に戻ると一目散にカーペットの下に隠れてしまったんだ。だけど、カーペットの下に隠れてもボクのドキドキは全然止まらない。アワワアワワ。何でボクっていつもこうなんだ。するとオヒメサマの声が聞こえて来た。

「ゴキちゃ〜ん、カーペットの下に潜ると何処に居るのか分からないわよ〜 出てらっしゃ〜い。一体何処に行っちゃったのかしら……？」

ボクはもう、オヒメサマが話し掛けてくれてるんだと思うだけで動悸が激しくなって、どんどん、どんどんカーペットの奥の方まで潜り込んでしまっていた。

「はあ、ドキドキした……」

ふと立ち止まって一息つくと、ボクは今一体、部屋のどこら辺に居るのか分からなくなっていた。いつもならカーペットの下でも方角が分からなくなることは無いのに、今まで走った道順を思い出そうとしてもさっぱり分からなくなっている。それに何だかまだ頭がボーっとしていた。

「……ま、いっか。オヒメサマの姿もちゃんと見れたし、声も掛けて貰ったし、今夜はこれでガマンしよっと。それに何だかボクとっても疲れちゃったよ」

ボクは急に眠気が差してくると、その場でうつらうつらしてきた。と、その時、いきなりボクの身体に何か重たい物がのしかかった。と思ったら、ウツと苦しくなってボクは身動きが取れなくなってしまった。

「な・なんだ…… く・くるしい…… も・し・か・し・て……」

なんと！ ボクはストーブの下敷きになってしまっていた。皮肉なことに、その日に限ってカーペットに潜り込んだボクを気遣ったオヒメサマが、一寸だけストーブの位置を移動してしまったのだ。嗚呼、何という運命だろう。

「ゴキちゃ〜ん、何処に居るのお〜？ カーペットの中にずっと居ると危ないから出てらっしゃ〜い。ホント、何処に隠れちゃったのかしら…… さあ、ストーブの火を点けるわよ。直ぐに暖かくなるからねえ〜 ところで今夜の音楽はね……」

徐々に薄れて行く意識の中、ボクのことを心配してずっと声を掛け続けてくれるオヒメサマの優しい声が、ボクの耳元に心地よく響いていた。

「……ああ、オヒメサマ！ ボクは…… オヒメサマの…… 手に掛かって…… 死ぬのなら…… ほ・本望だあ…… あああ」

ボクハ サミシイトキ オヒメサマニ アイニイク  
ボクハ カナシイトキ オヒメサマニ アイニイク  
ボクハ ツライトキモ オヒメサマニ アイニイク  
ダケド ウレシイトキ タノシイトキ オモイダス  
ボクガ スゴシタ オヒメサマトノ ヒビ

オヒメサマ ボクハ イマモ テンゴクデ  
シアワセ デス

アリガトウ ゴキチャン ソシテ ゴメンナサイ  
アレカラ マイバン アナタヲ マッテ  
ズット シンパイ シテマシタ  
デモ キョウ オハナガシガ  
デキテ ヨカッタワ  
マタ アイ  
マシヨウ

了